都留市博物館「ミュージアム都留」開館一周年記念秋季特別展

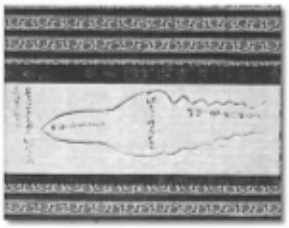
『芭蕉・旅・甲州』

今回の秋季特別展『芭蕉・旅・甲州』は、松尾芭蕉の谷村来訪という、文学史上の事件を、様々な資料を通して視覚的に楽しんでいただくことを目的としています。

芭蕉の生い立ちとその俳句の世界、高山麋塒の人となりと芭蕉との交流、そしてその交流に影響を受けた、後の時代の人たちの動きについて、可能な限り確実な資料を用いて展示してあります。

これらの書籍や真蹟（本人の筆による文字資料）などから、当時の谷村における文学的な交流の様子を思い描いていただくことができれば幸いです。

芭蕉門人が描いた芭蕉画像



旅に同伴した万菊のいびきを芭蕉が描いたもの

■展示構成

一、芭蕉へのプロローグ

「松尾芭蕉」へのいざないのコーナーです。芭蕉の知識背景になったと思われる『埋木』、『蘭太暦』や、肉親に対する思いのあらわれた「遺言状」にご注目ください。

二、旅と天和・貞享時代

芭蕉と麋塒が交流を育んだ、天和・貞享年間に注目したコーナーです。芭蕉の旅の様子を表す資料のほかに、麋塒が活躍している俳書二点、また当時の芭蕉の真蹟をご覧ください。

三、麋塒　そして芭蕉との交流

ここでは、麋塒について、俳諧を始めた頃の短冊と、晩年の手紙が展示してあります。また、江戸と谷村における芭蕉との交流を、真蹟懐紙と俳諧古巻で示してあります。この二点は、ともに最近発見された、非常に貴重なものです。

四、その後の波紋

このコーナーでは、芭蕉と麋塒の交流や、芭蕉の甲州に関わる句を記念して、後の時代に出版された書籍などを展示してあります。江戸中期から幕末にかけての、興味深い資料です。

会　期　11月26日(日)まで
開館時間　午前9時～午後4時30分（入館は4時まで）
休館日　11月6日(月)　13日(月)
入館料
一　般　600円(420円)
高校・大学生　400円(280円)
小・中学生　200円(140円)
（　）内は、20名以上の団体料金

※会期中に、一部展示替えがあります。また、11月20日県民の日は、無料開放を行います。

次回企画展

『思い出の20世紀展』

本年度新たに募集しました「市民学芸員」及び市民の皆さんにご協力をいただき、昨年度に引き続き、懐かしい資料とともに本市の百年を振り返ります。

前期は「都留市誕生　―旧町村の変遷―」と題しまして、旧七町村がいかに変遷し、現在の都留市を形づくっていったかについて展示します。この百年の都留市の歩みをたどり、これからの都留市を考える機会としてください。

会　期
前　期　12月5日(火)～平成13年1月14日(日)

休館日　毎週月曜日、第3火曜日祝日の翌日、12月27日～1月5日

「私の20世紀思い出の一品」を募集中！

ミュージアム都留寺子屋講座【第五回芭蕉月待講座】より

秋元家・高山家のその後 ―後代俳人の顕彰運動―

現存する最も古い芭蕉の書簡は、天和元年（一六八一）五月十五日付け、麋塒宛てに俳句を指導した書簡です。丁寧かつ忌憚の無い芭蕉の物言いからは、二人のそれ以前からの親しい付き合いが想像されます。この天和元年から天和三年（『野ざらし紀行』の帰途、麋塒を訪ねたとすれば貞享二年まで）の間に芭蕉と麋塒の交流は集中しており、以後芭蕉は甲州訪問の思いを表明しているものの、その機会も無く、元禄七年（一六九四）大阪で客死します。そしてその思いは、芭蕉の死より一年後、元禄八年（一六九五）の杉風からの書簡により、麋塒に伝えられています。

宝永元年（一七〇四）秋元藩の川越への転封に従い、高山家は谷村を離れます。

江戸時代、芭蕉復古の思潮は享保年間と安永・天明・寛政年間の二期に分かれて起こります。第一次芭蕉復古運動のあった享保二十年（一七三五）、宗端は川越の高山家を訪ねます。おそらく高山家は芭蕉に関わる資料を大切にしていたのでしょう、このとき宗端が目にすることのできた資料は「松風の文台」ただ一点のみでした。

明和四年（一七六七）、秋元藩は川越から山形へ転封し、高山家は甲州からさらに離れていきます。

第二次芭蕉復古運動のあった天明三年（一七八三）、名古屋の俳人暁台が甲州を通過して、甲州に関わる芭蕉の句を記録します。このころ、復古運動の一つとして、多くの俳人が芭蕉の足跡を追って旅をし、そこから情報の交換も行われました。この時代、山梨にも多くの俳人が訪れています。

寛政五年（一七九三）には芭蕉の百回忌を迎え、三車上人が『こまづか集』を編集するなど、運動は最高の盛り上がりをみせます。ですが、その時高山家は沈黙を守ります。

文化六年（一八〇九）には、谷村において運水が『氷面鏡九十四人集』を編集します。

天保四年（一八三三）、江戸の一風が『三津和久美』を編集、高山家の資料が正確に紹介されており、高山家からの資料の流出を物語っています。

弘化二年（一八四五）、秋元藩は館林へ転封します。この後、高山家からは芭蕉に関する資料が断続的に流出したものと思われます。

安政六年（一八五九）上州の白亥が館林の高山家を訪問し、『真すみの鏡』を刊行。その中で高山家の資料が数点紹介されており、三度の転居と歳月を経て、高山家の芭蕉の資料への思い入れが薄れていったことが伺えます。

いずれにしても、これら後代俳人の復古運動を経て、芭蕉は普遍的な存在となり、現在も「俳聖」として礼賛されています。